種子島におけるヤクタネゴヨウの個体数と鹿児島県本土における由来

九州大学農学部 金谷 整一・齋藤 明
玉泉幸一郎

1．はじめに

日本レッドデータブックによると，危急種にランクされている4種の裸子植物のうちヤクタネゴヨウ（*Pinus armandii* Franch. var *amamiana* Hatusima）は，屋久島と種子島にしか自生していない樹高20メートル以上，胸高直径1メートル以上になる五葉松である。

それは三木[10]によると，関東から関西にかけての第3紀の地層から遺体が発見されていることから，かつて日本に広く分布していたが，現在ではごく限られた地域にしか自生しておらず，そのほとんどが絶滅したとしている。

これまでにヤクタネゴヨウに関する報告[1,2,3,17]では，個体数は屋久島で約1000～1500個体，種子島で約100個体と推定している。この様に，現存木のおおまかな個体数や自生地域についての記載はあるが，過去の個体数や分布等については，とりまとめられた報告はない。

今後の保全対策を模索していくために，過去から現在にかけて個体数の推移を把握することや，現在植栽されてある個体の由来をあきらかにすることが必要であると考え，ここでは，種子島と鹿児島県本土について文献調査並びに植栽木の由来の調査を行った。

2．調査方法

文献調査は，鹿児島県立図書館並びに鹿児島県歴史資料センター黎明館資料編纂室，尚古集成館の蔵書の中から過去の個体数や分布，その利用や用途について調べた。

植栽木の由来については，所有者からの聞き取り調査を実施した。

また，現存木の成育状況の調査も併せて行った。

3．結 果

(1) 種子島

種子島における個体数の推移を表－1に示した。

調査時期，調査地域，調査者によってばらつきがみられるが，江戸時代の文献に「當島の松は頗る良材なり」[4]と，かなり評価が高かったことから当時，藩の財産として厳しく管理され，多数の個体が各地に存在していた[11,15]。

明治時代以降，沿岸の漁業や交通に使用される丸木舟の材料として頻繁に利用され始め[5,6,7,8,11,12,13,14]，丸木舟製作数の推移（表－2）にみられるように，大正時代には約500隻分の伐採がなされ急激な個体数の減少が起きた。

現存木は島の中央部に集中して分布し，今回の調査では，53個体が確認された。そのうち天然木は42個体で，ほとんどが単木的に分布しており，その周辺にはマツクイムシ被害と思われる枯死木が点在していた。またその林床には後継樹は生育していなかった。

(2) 鹿児島県本土

県本土においては，現在8カ所に140個体が生息し，それらは種子島由来の植栽木であった。

種子島より持ち込まれた場所と時期は，高山町波見権現山には室町時代に重氏が[9]，磯庭園には百数十年以上前に薩摩藩29代当主島津忠義が[16]持ってきたらしい。また，知覧町豊玉姫神社には，昭和5年に中種子町増田産の苗木が記念樹として植えられていた。

各地に現存するほとんどの個体は，磯庭園由来の実苗や接ぎ木クローンであり，高山町波見権現山由来の個体は，高山町内に4個体がみられた。

4．まとめ

種子島における過去の個体数は，500個体以上あり，現在推定あるいは実際に見られる個体数よりもはるかに多かったといえる。

個体数の急激な減少は，丸木舟の材料や戦後の建築用材としての商業的伐採等の人為によるものと，近年のマツクイムシ被害が原因であると考えられる。

現在林床には，後継樹が生育していないことから，こ

Seiichi KANETANI, Akira SAITO and Koichiro GYOKUSENN (Fac. of Agric., Kyusyu Univ., Fukuoka 812)
The population of Yakutanegoyo (*Pinus armandii* Franch. var *amamiana* Hatusima) in Tanegashima Island and it's origin in mainland of Kagosima prefecture.

のまま放置すれば種子島のヤクタネゴヨウは，近い将来絶滅する危険性がある。

鹿児島県本土の由来をまとめると図－1に示されるように，少なくとも種子島産の3系統があることが明らかである。しかし，ほとんどは磯庭園由来の個体で占められ，遺伝的に近い個体が植栽されていた。実際に磯庭園産の種子は，自家受精によってシイナやアルビノの率が高いといわれており[3]，これから先，他の系統と交配がなければ，次第に衰退していくと考えられる。

5．謝　辞

本調査を行うにあたり，現地の案内をしていただいた中種子町教育委員会の岩坪博秀氏，高山町役場の小森忍氏，文献の収集に際し御助言をいただいた鹿児島県歴史資料センター黎明館の尾口義男氏，徳永和喜氏，尚古集成館の松尾千歳氏，並びに調査の協力をしてくれた鹿児島大学農学部の湊貞行君，久原由美子さんに深く感謝いたします。

6．引用文献

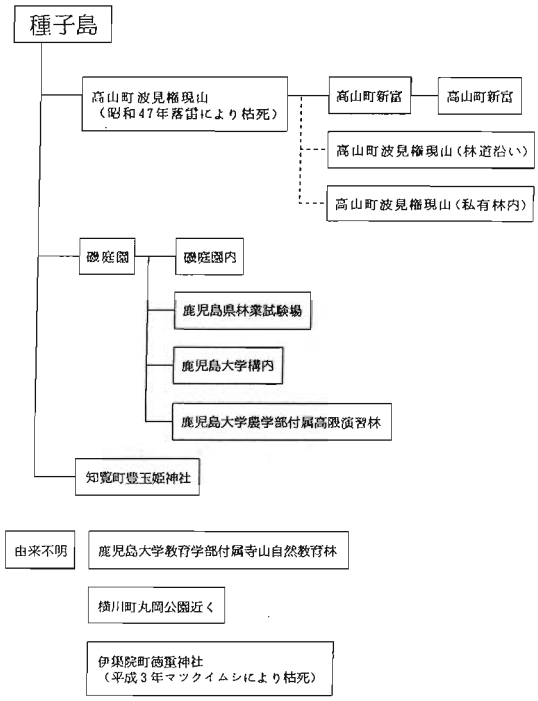
1）明石孝輝：林木の育種，171，1～4，1994
2）林　重佐：林木の育種，147，11～131988
3）――ほか：鹿大農演報，12，67～77，1984
4）五代秀堯・橋口兼柄：三國名勝圖會，4，pp.335，青潮社，熊本，1982
5）平山武章編：種子島を語る，64～67，種子島を語る会，鹿児島，1969
6）鹿児島民具学会編：かごしまの民具，242～243，慶友社，東京，1991
7）川崎晃稔：薩南諸島の刳舟製作習俗聞書，1～2，南島民俗研究会，鹿児島，1976
8）――：日本丸木舟の研究，1～4，法政大学出版局，東京，1991
9）高山郷土誌編纂委員会：高山郷土誌，25～26，高山町，鹿児島，1966
10）三木　茂：メタセコイヤ（生ける化石植物），75～76，日本鉱物趣味の会，京都，1953
11）盛園尚考編：種子島民俗，15，11～14，種子島科学同好会，鹿児島，1963
12）中種子町郷土誌編集委員会：中種子町の郷土誌，641～642，中種子町，鹿児島，1971
13）中種子町歴史民俗資料館：種子島最後の丸木舟，pp.24，中種子町立歴史民俗資料館，鹿児島，1983
14）西之表市編纂委員会：西之表市百年史，494～495，西之表市，鹿児島，1971
15）鮫島宗美訳：種子島家譜，1，pp.108，228，320，熊毛文学会，鹿児島，1962
16）島津忠重：炉辺南国記，pp.42，島津出版会，東京，1957
17）山本千秋・明石孝輝：105回日林講，750，1994

表－1　種子島におけるヤクタネゴヨウの実測個体数推移

西　暦（年）	個体数
1685	247[15]
1748	355[15]
1755	428[15]
1782	28[15]
1988（林）	24[3]
1994（山本・明石）	38[17]
1994（金谷・齋藤・玉泉）	53

表－2　種子島における丸木舟製作数の推移

西　暦（年）	丸木舟数（隻）
1918	478[7]
1945	277[7]
1968	86[7]
1971	70[14]
1983	22[13]



図－1　鹿児島県本土の個体の由来